

ちば会議 vol.2 ゲストスピーカープロフィール



ドットパルレー
こさか かずみ
小坂 和巳 氏

会社員生活にピリオドを打ち、自分の強みも弱みも考え尽くして、お店を出すならこれだと決めたのは、お直しとお洋服のお店。8 月でオープン 1 周年を迎えた Parler が、住宅地の中に店主の個性が点在する「裏チバ」に、また新しい風を吹かせています。

店主を務めるのは、10 代の頃から「いつも周りとは違う服ばかりを着ていた」という小坂和巳さん。店名の Parler はフランス語で会話という意味で、こだわりの服を売るだけでなく、お直しもやるようになったのは、お子さんが自分のお気に入りのアイテムに執着するその姿にハッとさせられたからなのだそうです。依頼時や納品時など、お客さんのこだわりや好みを聞く時間は、小坂さんにとってとても大事な時間になっています。

店内に置かれたソファに座って、小坂さんとたくさん会話して帰る人も少なくないそうですが、Parler にとってそれは当たり前の光景。積極的にマルシェに出店したり、店内でコラボイベントを開催したりするのも、もっとお店のことを知ってもらいたいという気持ちはもちろん、そこで新たな関係が育まれていくからです。

会社員時代終盤は、マネジメントする立場に違和感を覚えたこともあったそうですが、独立して、自身の”らしさ”を取り戻していくとともに、来る人、組む人の”らしさ”も引き出す小坂さん。ちば会議[vol.2]では、Parler 店主の小坂和巳さんに、お店にちりばめられたその想いやこだわりについてお話いただきます。



つなぐファーム&さくらキャンプ
しのざき げんた
篠崎 源太 氏

代々続いてきた土地を、どう守り、次世代へと繋げていくか――。

土気駅から車で 5～10 分。かつては上総国の一拠点としてお城が構えられていたその大木戸地区で、小さい頃からおじいちゃん子で育ったという篠崎源太さん。ある時、300 年続く先祖代々の位牌を見て、自分にできることは何なのか、その”使命”を感じたと言います。

しかし、山を守り、土地を継ぐためには、人手もお金もかかるという現実。同じ立場の多くの人たちが、泣く泣く土地を手放していくことも少なくない中で、たまたまやってきた「自然エネルギー×農業」という新たな分野に挑戦する「つなぐファーム」メンバーたちとの出会いが、篠崎さん自身、生まれ育った自然豊かな場所の可能性に目覚めるきっかけとなりました。

2022 年には、自宅に隣接した大きな桜の木がある敷地内にキャンプ場「さくらキャンプ」をオープン。昨年には、意を決して長年勤めた会社を辞め、つなぐファームに合流して、公私共に、地元で暮らすことを決意しました。新しく地域にやってきた人たちと地元との橋渡し役も務めながら、毎日を過ごしています。

かつては、上総国の中に位置して、城もあった同エリアで、土気駅周辺の住宅や商業施設の開発を経験し、小さな頃は、クラスの 9 割が新住民という体験もしてきた篠崎さん。そんな篠崎さんが、今改めて、このエリアの可能性に魅せられ、持続可能な地域の姿にチャレンジしています。

一人では難しいかもしれないけど、仲間がいればできる。ちば会議[vol.2]では、つなぐファームメンバーで、さくらキャンプオーナーの篠崎源太さんに、その想いとプロセス、そして、千葉市の郊外の魅力と可能性についてお話いただきます。

ちば会議 vol.2 ゲストスピーカープロフィール



サインペインターズ
大槻 貞智 氏・ERICA 氏

古くて新しい仕事。プリントで看板を作るのが当たり前のこの時代に、昔ながらの手書きの看板で街を彩る 2 人組ユニットが幕張を拠点に活躍の場を広げています。

お店のウィンドウや壁、住居や車などの様々な場所でその腕を振るうのは、地元幕張出身の ERICA さんと、福島出身の大槻 貞智さんの 2 人で構成する、その名も SIGN PAINTERS。同じ師匠のもとで技術を学んでいたことをきっかけに一緒に仕事をするようになった 2 人は、現在、ERICA さんの地元である幕張を拠点に活動をしています。

サインペイントの世界にすっかり魅了され、その道を進むことを選んだという ERICA さんと貞智さん。筆跡を感じる手書きの文字や、金箔や真鍮などを施すことによって生まれるその質感が、ならではの雰囲気をつくりだし、1 つ 1 つの作品が、まちの軒先を彩ってきました。外での作業が多いので、制作過程そのものがライブパフォーマンスにもなり、まちの人たちと交流しながら、作品ができあがっていくのだといいます。

1 つの作品を阿吽の呼吸で役割分担して仕上げていく 2 人ですが、やっている仕事は同じでも、それを、デザイナーとして認識する ERICA さんと、職人として取り組む大槻 貞智さん。2 つの個性とキャラクターが、1 つのユニットを組むことによって、また新たな可能性を引き出しているのかもしれない。

次はどのお店が、SIGN PAINTERS の手によって、彩られていくのでしょうか。ちば会議[vol.2]では、SIGN PAINTERS の大槻 貞智さん・ERICA さんに、サインペイントの魅力とここに至るまでの道のりについてお話いただきます。



印度料理シタール レストラン部門
増田 理絵子 氏

44 年前に開業し、カレーの名店として全国にその名を轟かせてきた、印度料理シタール。増田理絵子さんは、両親が立ち上げ、育ててきたそのお店に、新卒すぐに入社。現在、レストラン部門で奮闘を重ねています。理絵子さんにとって、生まれた時から存在しているシタールは、お店もスタッフも、家族同然。シタールには、勤続年数が長いスタッフが多く、お母さんみたいな存在な人も多いのだと言いますが、「お店自体が、お兄ちゃんのような存在」と語るところに、理絵子さんの側に、いつもシタールが存在してきたことを強く感じます。

実は、中・高・大と東京の学校に通っていた理絵子さんですが、アルバイトは、脇目を振らず、大学時代ずっとシタールで。キャリアとしては、卒業後、外で修行して、戻ってくる選択肢も考えられましたが、両親が元気なうちに「学べるだけ、学びたい」と「(ご両親宛に)エントリーシートを書いて」シタールに入社したのだといいます。

ご両親が見せ続けてくれたのは、地域における個人店の価値とそこで働くことの意義。仕事を通じた幸せとは、稼ぐことだけではないのだと気づかせてくれました。

「シタールのカレーが好きだし、シタールの人が好き」と語る理絵子さんは、まもなく 50 周年を迎えるシタールを 100 年、150 年続くお店へとすべく、チャレンジを重ねています。まだまだ調理場で修行中と言いますが、自身が提案したカレーが今期、秋メニューに採用。いずれは、輸入部門にも関わりたいと、その意欲は膨らみます。ちば会議[vol.2]では、印度料理シタール・レストラン部門の増田理絵子さんに、ここに至るまでのプロセスと、シタールへの想いについてお話いただきます。